

2016年11月

## 第5回 留学生レポート

2014年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生  
Stanford University Department of Economics Ph.D. student  
野田 俊也 (Shunya Noda)



2016年の11月12日、ロサンゼルスにて。UCLAに留学中の友人を訪ねてきました。サンフランシスコやニューヨーク、ボストンと比べると、日本人にとってどことなく馴染みのある都会感があって住みやすそうな街だな、と思いました。距離も近く、時差もないので、また暇があれば遊びに行きたいです。旅行した週末は11月にもかかわらず、半袖・半ズボンで快適に過ごせる気温で、スタンフォードに輪をかけて南国の様相を呈していました。

2014年秋より、スタンフォード大学のPh.D.プログラムに留学している野田俊也です。3年目に入り、研究にすべての力を注ぐフェーズへ移行しました。やりたかったことを好きなだけできるのはとても嬉しいのですが、自分を律するものがないので、墮落せず可能な限り自分の生産性を高めていくよう、生活習慣には以前より気を使っています。

## 1. スタンフォードのプログラムでの経過

授業は基本的に終了しましたが、けっこうたくさんの方の数のセミナーに出ています。セミナーは、現在のところ、月曜の昼食時に開催される Theory lunch、水曜の夕方に開催される Microeconomics seminar、金曜の昼過ぎに開催される Market Design seminar に出席しています。加えて、火曜日と木曜日には、「研究フェーズに入った大学院生として、general audience に対して説得的なプレゼンテーションをする練習をください」ということで、スタンフォードの3年生が同学年の学生に対して自分の研究を発表するという、Third year seminar も学期半ばまで開催されていました。これに加えて、他の分野のセミナーもトピックによっては出席したりしています。

この報告書を書いているタイミングでは火・木の Third year seminar は終了したものの、学期前半は週5日毎日セミナーがあるというスパルタンなスケジュールで、情報のインフローがすさまじいことになっていました。スタンフォードのすごいところは、これだけ数があってもいわゆる「完全なハズレ」の発表はめったになく、どの発表もなかなか示唆に富んだもので、聞いていて何らかの収穫があったことです。もちろん、すべてのアイデアがトップジャーナルに掲載されるべきものとは思いませんでしたが、出席して時間の無駄だったと思うものはほとんどありませんでした。

## 2. 研究に関する進展

6月に仕上げにかかっているとご報告した、“Full Surplus Extraction and within-period Ex Post Implementation in Dynamic Environments” は、先日 2nd round の Revise and Resubmit をリクエストされました。Accept の知らせほどではないものの、基本的には喜ぶべき返答だと思いますが、この報告書でパブリケーションのご報告ができただけに、残念な気持ちも混ざります。初稿と比べるとずいぶん色々な部分を改善できたのは間違いありません。ただ、まだまだ洗練された英文論文を書く技術には研鑽が必要だとも思いました。一刻も早くよいご報告ができるよう、一生懸命がんばります。(今回の報告書で、この論文についての簡単な解説をしようかとも思っていたのですが、それは accept された折に回したいと思います。)

現時点で完成しているもう一報の論文である、“Mechanism Design in Hidden Action and Hidden Information: Richness and Pure Groves” は、最初に投稿したジャーナルに reject され、現在は revision と再投稿待ちの状態となっています。この論文は、貢献の大きさが説明の仕方によってずいぶん変わって見えるタイプのものだと思うので、しっかりと売れるべきものを売り出していきたいところです。おそらく冬の一時帰国時にアップデートを完了して、どこかのジャーナルに再投稿ということになると思います。共著者の松島斉教授が、2016年12月13日に東京大学でこの論文を発表予定ですので、ご興味がおありの同業者の方はぜひご出席ください。

新規の論文として、東京大学の政治学研究科に在籍している勝又裕斗君との共著論文で

ある、“Ballot Box or Lottery Box? On the Indeterminacy of Winners under the Single Non-Transferable Vote”（仮題）も大詰めの段階に入っていて、少なくとも次回のレポートの執筆時までには Working paper として公開されているかと思います。日本の参議院選挙などで採用されている中選挙区制の一種、Single Non-Transferrable Vote（単記非移譲式投票：1つの選挙区から複数人の候補者が当選するのに対し、各有権者は1人にしか投票できないという投票方式）の均衡を分析した論文で、そこそこ広範な状況で、有権者の人数が十分多くなっても（数学的には無限人に発散したとしても）、当選する候補者が確率的に決まってしまうという非決定性（indeterminacy）を証明しました。現在は、すでに明瞭な結果が出ている理論パートに対する実証分析の結果をまとめている段階です。こちらは、年明けの2017年1月6日に、[国際研究集会「計量・数理政治学のフロンティア」](#)にて、共著者の勝又君が発表する予定となっていて、次回の報告書のタイミングまでに初稿が公開されていると思います。

この他、もう1報、現在取り組んでいる単著論文がありますが、これはまだまだ未完成なので、ご報告はもう少し内容がまとまってからにしようと思います。少なくとも現段階ではこの論文にも大きな弱点があって、これからはその弱点をどうカバーしていくかという戦いになりそうです。9月から現在までは、ほぼすべての時間をこのプロジェクトに充てていたのですが、“Full Surplus Extraction”の論文が手元に返ってきてしまったので、しばらくは保留状態となってしまうそうです。

### 3. 「比較制度分析のフロンティア」

2016年9月8日にNTT出版から発売された、『[比較制度分析のフロンティア](#)』（青木昌彦/岡崎哲二/神取道宏 監修）という本の第6章に、私が日本語訳を担当した東京大学の神取道宏教授の論文、「経済学の理論と現実—3つの寓話の洞察（原題：Theory and Reality in Economics: Insights from Three Allegories）」が掲載されています。

経済学という学問の、自然科学等と比較した本質と、それに由来するアカデミアの風習や研究姿勢についての論考です。経済学はモデルの設定や、仮定されるパラメータの値が現実のものとは完全に一致させられないことから、その予測の精度・有効性に疑問を呈されることもよくあります。本稿で述べられている、この点に関する神取先生の意見は非常に的確で、経済学を批判する立場の方も、擁護する立場の者も、議論に臨む前にぜひ一読してほしい内容です。

また、経済学の論文の査読の長さ・厳しさは、他分野の方々からはしばしば異様と捉えられます。これは、私が「2. 研究に関する進展」でご説明している近況からもお察しいただけるのではないのでしょうか。この点については、例えばOR・金融工学の専門家で、経済学系の雑誌にも論文をパブリッシュしている今野浩先生の『工学部ヒラノ教授』シリーズなどで批判的に説明されていますが、その点に対しても一定の説明を与えています。個人的には、経済学を取り巻く自然科学とは異なる特殊な状況を踏まえても、論文査読はもう少し間口

を広げた上でスピーディに進めるようにしたほうがよいと思うのですが、本稿は経済学の査読が厳格となった原因の非常に的確な分析だと思います。

#### 4. 経済セミナー 2016年10・11月号 海外論文 SURVEY

日本評論社から発売されている、日本の経済学界における代表的な（学術誌でない）業界誌である「[経済セミナー](#)」2016年10・11月号の、海外論文 SURVEY のコーナーに、私の原稿が掲載されています。

今回は、Arnosti, Beck and Milgrom (2014): "Adverse Selection and Auction Design for Internet Display Advertising" の解説記事を書きました。インターネットの広告枠のオークションでは、掲載される広告の質の違いから、「広告主がどれくらい正確に広告枠から得られる収益性を把握できるか」に違いが生じ、これが逆淘汰（Adverse Selection: この場合は、情報力の意味で不利な広告主が広告枠を落札できたときには、枠の質が悪い傾向にあるという現象）の問題を発生させます。この逆淘汰問題のマーケットデザイン的な解決策を提示した論文です。ご興味がおありの方は、ぜひお近くの書店・図書館で経済セミナーをお探しください。

#### 5. 2016年冬 海外大学院留学説明会@東京大学

今年の6月から、米国大学院学生会の広報係として、会長の南出将志君や Web 系の勝谷郁也君らと一緒に活動しているのはすでにご報告しましたが、この冬は米国大学院学生会主催の海外大学院留学説明会にパネリストとして参加します。今回は、パネリストとしての下準備ももちろんですが、この説明会の会場責任者も担当しているので、裏で色々と忙しく働いています。

今回は、同じく Funai Overseas Scholarship の奨学生である、カーネギーメロン大学の青木俊介君と、パデュー大学の鶴飼貴也君に講演を依頼しました。青木君も鶴飼君も、大学院留学生としては少し珍しい経験をしているようなので、面白い講演会になるのではないかと期待しています。

以下、ご興味がお有りの方向けに、[Web ページへのリンク](#)を載せておきますので、留学の情報を求めてこの報告書を読んでいる方はぜひご来場ください。

#### 6. 2016年の米国大統領選の結果について

私はあまり強い政治的信条は持っておらず、また政治的な意思表示をこの場でするつもりもないのですが、先日のアメリカの大統領選で共和党のドナルド・トランプが民主党のヒラリー・クリントンを破って当選したことは、今後の私の進路にも少なからぬ影響を与えるかもしれません。

ご存知の通り、カリフォルニア州は民主党の大票田で、特に留学生が多数在籍しているスタンフォード大学では民主党の支持者が多いです。選挙前の2016年11月4日に発行され

たスタンフォード大学の代表的な学生新聞である **The Stanford Daily** の調査によると、スタンフォード大学の学生の **62.6%**が民主党の支持者であり、共和党の支持者は **7.4%**に過ぎません。また、自らが **Liberal** だと答えた学生は **62.1%**なのに対して、**Conservative** だと答えた学生は **8.8%**でした。このことを差し引いても、今回の大統領選でヒラリー・クリントンを支持すると回答した学生は **84.7%**おり、これはドナルド・トランプを支持すると回答した学生の **3.9%**をはるかに上回っています。スタンフォード大学では、従来は共和党を支持している学生も、今回の選挙に関してはヒラリー・クリントンを支持した人が多かったようです。スタンフォードの学生には、不法移民によって割りを食った人は少なく、中南米からの優秀な留学生らと環境を共有することで便益を得た人は多いはずなので、これは自然な反応に見えます。

スタンフォードを取り巻く環境はこのような感じなので、ドナルド・トランプの当選は大学に激震をもたらしました。私はニューヨークやサンフランシスコ、あるいはバークレーや UCLA など起こったという反トランプのデモこそ目撃していませんが、選挙の翌日は道路にチョークで描かれた反ヘイトスピーチのメッセージを大量に目にしました。スタンフォード大学の理事長である **Marc Tessier-Lavigne** からも、“**This year’s election season has been among the most divisive in memory. For many in our community, the presidential campaign and election have generated great uncertainty, regardless of political preference.**” からはじまる、「スタンフォード大学の多様性を尊重するポリシーに変更はないから心配するな」というメッセージが届きました。また、留学生センターからも、「大統領選の結果を受けて、不安になったり、気分が悪くなったり、直接的な被害を受けたりしている場合にはサポートするのでただちに連絡するように」という連絡がありました。大学からこのような「気遣い」を受けるのは、4月に起こった熊本地震のとき以来です。

私の専門分野である経済学に関して言えば、少なくとも今のところ、ドナルド・トランプが経済学界からの政策提言を軽視しているのは悪い傾向だと思っています。選挙時には **793**名の経済学者がドナルド・トランプの経済政策を批判する声明に署名を行っています ([“Open Letter: 793 Economists Oppose Trump”](#))。私もこの **Open Letter** に列挙されているポイントのすべてを把握しているわけではありませんが、各分野の専門家である同僚たちと世間話をした感触だと、“**His statements reveal a deep ignorance of economics and an inability to listen to credible experts. He repeats fake and misleading economic statistics, and pushes fallacies about the VAT and trade competitiveness.**” であることは間違いなく、だとすれば彼の政権の下では、経済学の成果は十分に生かされないということになります。そうなったとすれば、経済学の研究者としては残念と言わざるを得ません。アメリカにおける経済学の研究環境が悪化することも若干心配しています。

私の予想では、少なくとも博士課程の学生生活の間に大きな環境の変化はないと思います。また、ドナルド・トランプの移民制限策は、今のところ **Ph.D.**ホルダーのような高度な技術を持った人間は対象としていないので、ここについてもそれほど不安視しなくてもよ

いかかもしれません。ただ、将来の不確実性が増したことは間違いなく、当面の間、色々なケースを考えて慎重にキャリア・プランを考えなければならないように思いました。

## 7. 終わりに

年末の忘年会には参加させていただきます。財団の皆様、Funai Overseas Scholarshipの奨学生およびOB・OGの皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

取り巻く環境に不確実性は生じても、結局のところ、自分の将来を安定させる一番よい方法は論文を書き、業績を積むことなので、やることに変わりはありません。最後になりましたが、私の研究生生活を支援してくださっている公益財団法人船井情報科学振興財団の皆様に、改めて厚くお礼申し上げます。引き続き、経済学の発展に貢献し、日本の、そして世界の未来に貢献するべく、一所懸命に研究に取り組みたいと思います。



ロサンゼルス・ベニス・ビーチで撮影したお気に入りの一枚。(角度はちゃんと計算していませんが) 日の沈む先にはきっと日本があるはず。